

若草学園特殊学級勤務の頃

吉澤美保(昭和 37 ~ 40 年度在職)

若草学園に於ける 4 年間は、自分の生き方が変わったのではないかと思われる程、常に学ぶことの多い日々でした。ひとりでに子供達の名を呼んでみたくなるような、当時の情景が走馬燈のように脳裏を駆けめぐって、特有の甘酢つばい匂いさえも漂ってくるような懐かしさで一杯になります。30 年近く過ぎ去った今、本人は勿論、お家の方々の計り知れない苦闘を思い、あらゆる試練に堪えて成長したであろう彼等を思います。

1 カーテンの仕切り

5、6 年生の教室は、1 枚のカーテンで仕切られており、子供達は常に行ったり来たり仲良しでした。放課後のリハビリを兼ねた散歩も一緒に、時には、水道山迄足を延ばし外の空気を胸一杯に吸い込んで、土手に腰をおろし、10 円のアイススティックに舌鼓を打ちながら疲れた足をのばした事もなつかしい思い出でした。併し園外に出れば楽しい事ばかりではありません。通行人の刺すような視線や、親切ごかしの冷たい言葉に思わず息を呑むことも度々でしたが、彼等は、「馴れているから平気。」と平然としていました。怒りや悲しみをじっと噛みしめて堪えるという強い精神力を養っていったのでした。カーテン一枚で仕切られた教室にもどった時、子供達は屈託のない少年少女でした。

2 手術の後

彼等にとって、何と言っても期待と不安で祈り続けるのが手術でした。

「この間の手術はこれだけ、今度良くなるかなあ。」と、手術の傷跡も生々しい K 君、二度の手術にも彼の右腕に力が入るようにはなりません。「痛みがなくなったので忘れてベッドから飛び降りたら、足に針金が入っていたため、頭の先まで、ジーンと痛くて瞬間意識がなくなってしまったよ。」と言う O 君。火傷の皮膚移植の S 君。子供達は何気なく話合っているが、みんな、みんな大きな期待に胸を膨らませながら、付き添いもない手術台で頑張るのでした。

3 重症児クラスを持って

なんと言っても思い出の深いのは、13 名の重症児クラスを持った時の事でした。13 名中歩行可能児は僅かに 3 名で、殆どの児童は父兄の送迎に支えられ、授業中も椅子と一緒に転げてしまう危険がある為、教室の半分に古畳を敷いて座卓を置き学習をしたのです。性格は極めて素直で明るく、楽しい授業を展開することはできましたが、それが全部脳裏に刻み込まれるのには、中々の日数を必要としました。学習に気分がのってくると、それぞれの姿で一生懸命です。「くつ」が「くちゅ」になり、「しろ」が「いろ」になる。それでも声にならない声を張りあげ何度も発音を試みる。練習を重ねているうちに誰かが突然「つ、つ」と、いい発音をすると、自分の事のように体ごととびあがって、拍手をし大喜びをするのでした。カリキュラムは常に子供達の健康と感情を重視して考えました。

4 線にも夢がある

この組での思い出は限りありませんが、画用紙一杯にクレヨンで書きなぐる時の表情、真剣な眼差しを忘れることはできません。一本の曲がりくねった線や、大小の円の中に夢がいつばい詰まっているのです。点と線をかきまわった子は、「これはバカバカお馬にのって楽しかった。」と言い、赤いクレヨンを持った子は「お庭の花が真っ赤。」と説明し、10 歳の男の子は「妹とお菓子を食べた。」とまるまった線を見せてくれました。その点と線の中に沢山の夢がありました。この子供と過ごした若草学園での生活は、私にとって最も大切な人生の宝を得る事のできた素晴らしい場所であった、と思っております。



ケース会議